

わかれ道

樋口一葉

青空文庫

上

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとと羽目を敲く^{たた}音のするに、誰れだえ、もう寐^ねてしまつたから明日^{あした}来ておくれと嘘^{うそ}を言へば、寐^ねたつて宜^いいやね、起きて明^あけておくんなさい、傘^か屋^やの吉^{きち}だよ、己^おれだよと少し高^{たか}く言へば、嫌^{いや}な子^こだねこんな遅^{おそ}くに何を言^いひに来^きたか、又御餅^{おもちん}のおねだりか、と笑^{わら}つて、今^{いま}あけるよ少^{すく}時^じ辛棒^{しんぼう}おしと言^いひながら、仕立^{しだて}かけの縫^{ぬい}物^{もの}に針^{はり}どめして立^たつは年頃^{ねんころ}二十余^{にじゅうよ}りの意気^{いき}な女^め、多^{おほ}い髪^{かみ}の毛^けを忙^{いそ}がしい折^ひからとて結^{むす}び髪^{かみ}にして、少^{すく}し長^{なが}めな八丈^{やっぺい}の前^{まへ}だれ、お召^{めし}の台^{たい}なしな半天

を着て、急ぎ足に沓くつぬぎ脱へ下りて格子戸かうしどに添ひひし雨戸を明くれば、お気の毒さまと言ひながらずつと這はい入るは一寸法師ぼしと仇名あだなのある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て余しの小僧なり、年は十六なれども不ふ図と見る処ところは一か二か、肩幅せばく顔少さく、目鼻だちはきりきりと利口らしけれど何いかにも脊せいの低くければ人嘲あざけりて仇名はつけける。御免なさい、と火鉢そぼの傍そばへづかづかゆと行けば、御餅おかしんを焼くには火が足らないよ、台処ひけしつぼの火消壺ひけしつぼから消し炭すすを持つて来てお前が勝手に焼てお喰わたしべ、私は今夜中にこれ一枚つを上げねば成らぬ、角の質屋の旦那だんなどのが御年始着だからとて針を取れば、吉はふふんと言つてあの元はげ頭あたまには惜しい物だ、御初穂おはつうを我おれでも着て遣やらうかと言へば、馬鹿をお言ひで無い人のお初穂を着

ると出世が出来ないと言ふでは無いか、今つから延びる事が出来なくて仕方が無い、そんな事を他処よその家うちでもしては不用いけよと氣を付けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人ひとの物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何時いつかさう言つたね、運が向く時に成ると己れに糸織の着物をこしらへてくれるつて、本当に調こしらへてくれるかえと真面目まじめだつて言へば、それは調こしらへて上げられるやうならお目出度めでたいのだもの喜んで調こしらへるがね、私わたしが姿を見ておくれ、こんな容よう躰だいで人さまの仕事をしている境きよう界がいでは無からうか、まあ夢のやうな約束さとして笑つていけば、いいやなそれは、出来ない時に調こしらへてくれとは言は無い、お前さんに運の向いた時の事さ、まあそんな約束でもして

喜ばして置いておくれ、こんな野郎が糸織ぞろへを冠つた処がをかしくも無いけれどもと淋しさうな笑顔をすれば、そんなら吉ちやんお前が出世の時は私にもしておくか、その約束も極めて置きたいねと微笑んで言へば、そいつはいけない、己れはどうしても出世なんぞは為ないのだから。何故々々。何故でもしない、誰れが来て無理やりに手を取つて引上げてでも己れは此処にかうしてゐるのが好いのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ、どうで盲目めくらじの筒袖つつそでに三尺を脊負つて産て来たのだらうから、澁を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一本も当りを取るのが好い運さ、お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾めかけに成ると言ふ謎なぞでは

無いぜ、悪く取つて怒つておくんなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎なげくに、さうさ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからね、とお京は尺を杖ものさしつえに振返りて吉きちぞ三うが顔を守りぬ。

例いつもごとの如く台処もちいから炭だを持もち出して、お前は喰くひなさらないかと聞けば、いいえ、とお京の頭つむりをふるに、では己ごればかり御馳走ごちそうさまに成らうかな、本当に自家うちの吝嗇けちんぼうめやかましい小言こごばかり言ひやがつて、人を使つかふ法はをも知りやあがらない、死んだお老婆ぼあさんはあんなのでは無かつたけれど、今度の奴等やつらと来たら一人として話せるのは無い、お京さんお前は自家うちの半次はんじさんを好きか、随分厭味いやみに出来あがつて、いい氣の骨頂こつていの奴やつでは無いか、己ごれは

親方の息子だけれど彼奴ばかりはどうしても主人とは思はれない番ごと喧嘩けんくわをして遣り込めてやるのだが随分おもしろいよと話しながら、金網の上へ餅をのせて、おお熱々と指先を吹いてかかりぬ。

己れはどうもお前さんの事が他人のやうに思はれぬはどういふ物であらう、お京さんお前は弟おととといふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人娘ごで同胞けうだいなしだから弟にも妹いもとにも持つた事は一度も無いと云ふ、さうかなあ、それではやつぱり何でも無いのだらう、何処どこからかかうお前のやうな人が己れの真身しんみの姉あねさんだとか言つて出て来たらどんなに嬉しいか、首つ玉へ嚙かぢり付いて己れはそれぎり往わうじよう生しょうしても喜ぶのだが、本当に己れは木の股またか

らでも出て来たのか、遂ついしか親類らしい者に逢あつた事も無い、
 それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事
 が出来ない位なら今のうち死んでしまつた方が気楽だと考へるが
 ね、それでも欲があるから可笑をかしい、ひよつくり変てこな夢何か
 を見てね、平常ふだん優しい事の一言も言つてくれる人が母おふくろ親や父おやぢ親
 や姉あねさんや兄あにさんの様に思はれて、もう少し生てゐやうかしら、
 もう一年も生てゐたら誰れか本当の事を話してくれるかと楽しん
 でね、面白くも無い油引きをやつてゐるが己れみたやうな変な物
 が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母おふくろ親も父おやぢ親も空からつきり
 当あてが無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れはどう
 しても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたたきついつ例

も言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前笹づる錦の守り袋と
 いふ様な証拠は無いのかえ、何か手懸りは有りさうな物だねとお
 京の言ふを消して、何そんな気の利きいた物は有りさうにもしない
 生れると直さま橋の袂たもとの貸赤子に出されたのだなどと朋ほうばい輩の奴
 等が悪わるくち口をいふが、もしかするとさうかも知れない、それなら
 己こじきれは乞食の子だ、母おふくろ親も父親も乞食かも知れない、表を通る
 檻ぼろ褌を下げた奴がやつぱり己こじきれが親類まきで毎朝きまつて貰もらひに
 来る跣びつこめつち片眼めつちのあの婆ばばあ何かが己こじきれの為の何に当るか知れはし
 ない、話さないでもお前は大底しつてゐるだらうけれど今の傘屋
 に奉公する前はやつぱり己こじきれは角兵衛の獅しし子を冠つて歩いたのだ
 からと打しをれて、お京さん己こじきれが本当に乞食の子ならお前は今

までのやうに可愛がつてはくれないだらうか、振向いて見てはくれまいねと言ふに、串談をお言ひでないお前がどのやうな人の子でどんな身かそれは知らないが、何だからとつて嫌やがるも嫌やがらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟がどうだらうが身一つ出世したらば宜からう、何故そんな意気地なしをお言ひだと励ませば、己れはどうしても駄目だよ、何にも為やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。

中

今は亡うせたる傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身しんじやう上じやうを
 あげたる、女相撲おんなすまうのやうな老婆ばばさま有りき、六年前まへの冬の事寺
 参りの歸りに角兵衛の子供を拾ふて来て、いいよ親方からやかま
 しく言つて来たらその時の事、可愛想かわいそうに足が痛くて歩かれない
 と言ふと朋輩の意地悪が置ざりに捨てて行つたと言ふ、そんな処
 へ歸るに当るものか少ちつとも怕おつかない事は無いから私わたしが家に居うちなさ
 い、皆みんなも心配する事は無い何のこの子位のもの二人や三人、台所
 へ板を並べてお飯まんまを喰べさせるに文句が入る物か、判証文を取つ
 た奴でも欠落かけおちをするもあれば持逃げけちの吝けちな奴もある、了りよう簡けん
 次第の物だわな、いはば馬には乗つて見ろさ、役に立つか立たな

いか置いて見なけりや知れはせん、お前新網へ帰るが嫌やなら
 此家を死場と極めて勉強をしなければりやあ成らないよ、しつかり遣
 つておくれと言ひ含められて、吉や吉やとそれよりの丹精今油ひ
 きに、大人三人前を一手に引うけて鼻歌交り遣つて除ける腕を見
 るもの、さすがに目鏡と亡き老婆をほめける。

恩ある人は二年目に亡せて今の主も内儀様も息子の半次も気に
 喰はぬ者のみなれど、此処を死場と定めたるなれば厭やとて更に
 何方に行くべき、身は疝癩に筋骨つまつてか人よりは一寸
 法師一寸法師と誹らるるも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さ
 を喰たであらう、ざまを見る廻りの廻りの小仏と朋輩の鼻垂れに
 仕事の上の仇を返されて、鉄拳に張たほす勇氣はあれども誠

に父母いかなる日に失せて何時いつを精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては干場ほしばの傘のかけに隠れて大地だいちを枕まくらに仰向きあほの臥ふしてはこぼるる涙を吞込みぬる悲しさ、四季押とほし油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の玉の様な子だと町内こわに怕こわがられる乱暴も慰むる人なき胸ぐるしさの余り、仮にも優しう言ふてくれる人のあれば、しがみ附いて取ついで離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春よりこの裏へと越して来し者なれど物事に氣才とさの利きて長屋中への交際つきあいもよく、大屋なれば傘屋の者へは殊こと更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころびでも切れたなら私の家へ持つてお出いで、御家は御多人数ごたにんずお内儀さんの針もつていらつしやる暇はあるまじ、私は常住仕事たとう畳紙と首つ引の身なれば本ほん

の一針造作は無い、一人住居すまいの相手なしに毎日毎夜まいやさびしくつて
 暮くしているなれば手すきの時には遊びにも来て下され、私はこん
 ながらがらした気なれば吉きつちやんの様な暴さんれ様が大好き、疔癩ぢりが
 おこつた時には表の米屋が白犬を擲はると思ふて私の家の洗せんひかへ
 しを光沢つや出しの小槌こづちに、礎きぬたうちでも遣りに来て下され、それなら
 ばお前さんも人に憎にくくまれず私の方でも大助り、本ほんに両りやう為だめで
 御座んすほどにと戯じやう言だんまじり何時となく心安く、お京さんお
 京さんとして入いり浸びたるを職人ども翻から弄かひ弄か弄ひては帯屋の大將のあちらこ
 ちら、桂かつら川がはの幕が出る時はお半の脊中せなに長右衛門と唱うたはせて
 あの帯の上へちよこなんと乗つて出るか、此奴こいつは好いお茶番だと
 笑はれるに、男おとこなら真似まねて見ろ、仕事やの家へ行つて茶棚の奥の

菓子鉢の中に、今日は何が何箇いくつあるまで知つてゐるのは恐らく己
 れの外には有るまい、質屋の元はげあたま頭めお京さんに首つたけで、
 仕事を頼むの何がどうしたのと小五月蠅こうるさくはいりこ這入込んで前だれの半は
 襟んえりの帯つかはのと附つけとどけ届つをして御機嫌を取つてはいるけれど、
 遂つひひしか喜んだ挨拶あいさつをした事が無い、ましてや夜中でも夜中で
 も傘屋の吉が来たとさへ言へば寝間着のままかうしどで格子戸を明けて、
 今日けふは一日遊いちにちあそびびに来なかつたね、どうかお為しか、案じていたにと
 手を取つて引入いれられる者が他ほかに有らうか、お気の毒ななこつた
 が独活うどの大木たいぼくは役にたたない、山椒さんしよは小粒こつぶで珍重ちんじゆうされると高
 い事をいふに、この野郎やろうめと脊せを酷ひどく打たれて、有がたう御座ござい
 ますと済すままして行く顔かほつき背せいさへあれば人串ぢようだん談だんとて免ゆるすまじ

けれど、一寸法師の生意氣と爪つまはぢきして好なぶい嬲なぶりものに烟草たばこ休こみの話しの種成なき。

下

十二月三十日の夜よ、吉は坂上あつらの得意場へ詠おくへの日限おくの後れしを詫わびに行きて、帰りは懐ふところ手の急ぎ足、草履下駄の先にかかる物は面白おほじぶづくに蹴けかへして、ころころと転げると右に左に追ひかけては大溝おほじぶの中へ蹴落して一人からからの高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さまさも皓こうこう々と照し給たまふを寒たいと言ふ事知らぬ身なれば只ただここちよく爽さわやかにて、帰りは例の窓たを敲たたいてと目算ながら

横町を曲れば、いきなり後あとより追ひすがる人の、両手に目を隠く
 して忍び笑ひをするに、誰れだ誰れだと指を撫なでて、何だお京さ
 んか、小指のまむしが物を言ふ、恐赫おどかしても駄目だよと顔を振の
 けるに、憎くらしい当てられてしまつたと笑ひ出す。お京はお高こ
 僧頭そづきんまぶか巾目深ふうつうに風通の羽織いつも着て例に似合ぬ宜よき粧なりなるを、吉三は
 見あげ見おろして、お前何処どこへ行きなすつたの、今日明日は忙が
 しくてお飯まんまを喰べる間もあるまいと言ふたでは無いか、何処へお
 客様にあるいてゐたのと不審を立てられて、取越しの御年始うちさと
 素知らぬ顔をすれば、嘘うそをいつてるぜ三十日の年始を受ける家は
 無いやな、親類へでも行きなすつたかと問へば、とんでも無い親
 類へ行くやうな身に成つたのさ、私は明日あすあの裏の移ひっこし転をする

よ、余あんなりだしぬけだからさぞお前おどろくだらうね、私も少し不
 意なのでまだ本当とも思はれない、ともかく喜んでおくれ悪るい
 事では無いからと言ふに、本当か、本当か、と吉は呆あきれて、嘘で
 は無いじようだんか串談では無いか、そんな事を言つておどかしてくれなく
 ても宜いい、己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くな
 つてしまふのだからそんな厭いやな戯じようだん言ごは廃よしにしておくれ、
 忽とつまらない事を言ふ人だと頭かしらをふるに、嘘では無いよ何時か
 お前が言つた通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに来たといふ騒さわぎ
 だから彼あすこ処この裏には居られない、吉ちやんそのうちに糸織いとぞろひ
 を調こしらへて上るよと言へば、厭いやだ、己れはそんな物は貰もらひたく無
 い、お前その好い運といふはつまらぬ処ところへ行かうといふのでは無

いか、一昨日自家おととひうちの半次さんがさういつてゐたに、仕事やお京

さんは八百屋横町あんまに按摩あんまをしてゐる伯父さんが口入れて何処どこのか

お邸やしきへ御奉公ごほうこうに出るのださうだ、何お小間使こまぢひと言ふ年としではなし、

奥さまの御側ごせやお縫物ぬいものしの訳わけは無い、三つ輪さんりんに結むすつて総くさの下さつた

被布ひふを着るお妾めかけさまに相違さうゐは無い、どうしてあの顔かほで仕事しごとやが通

せる物かとこんな事をいつてゐた、己おれはそんな事は無いと思おもふ

から、聞違きかひだらうと言いつて大喧嘩おほげんくわを遣やつたのだが、お前まへもし

や其処そこへ行くのでは無いか、そのお邸おやしきへ行くのであらう、と問とは

れて、何も私わたしだとして行いきたい事は無いけれど行いかなければ成ならな

いのさ、吉きちちゃんお前まへにももう逢あはれなくなるねえ、とて唯ただいふ

言ことながら萎しほれて聞きゆれば、どんな出世しゅっせに成なるのか知らぬが其処そこへ

行くのは廃よしたが宜よらう、何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、あれほど利く手を持つてゐながら何故つまらないそんな事を始めたのか、余あんまり情ないでは無いかと吉は我が身の潔白に比べて、お廃しよ、お廃しよ、断つておしまいと言へば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張あに倦あきが来て、もうお妾でも何でも宜よい、どうでこんなつまらないづくめだから、寧いっその腐れ縮ちりめん緬めん着物で世を過ぐさうと思ふのさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つてほほと笑ひしが、ともかくも家へ行かうよ、吉ちやん少しお急ぎと言はれて、何だか己おれは根つから面白いとも思はれない、お前まへまあ先いへお出いよと後あとに附ついて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋の路次を

入つてお京が例の窓下に立てば、此処をば毎夜音づれてくれたのなれど、明日あすの晩はもうお前の声も聞かれない、世の中つて厭やな物だねと歎息たんそくするに、それはお前の心がらだとして不満らしい吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈らんぷに火を点うつして、火鉢を掻かきおこし、吉ちゃんやお焙りあたりと声をかけるに己れは厭やだと言つて柱際きはに立つてゐるを、それでもお前寒からうでは無いか風を引くといけないと気を付けければ、引いても宜いやね、構かまはずに置いておくれと下を向いてゐるに、お前はどうかおしか、何だか可怪をかしな様子だね私の言ふ事が何か疝かんにでも障つたの、それならそのやうに言つてくれたが宜いい、黙つてそんな顔をしてゐられると気に成つて仕

方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくても能いよ、己れも傘屋の吉三だ女のお世話には成らないと言つて、寄かかりし柱に脊を擦りながら、ああつまらない面白くない、己れは本當ほんとうに何と言ふのだらう、いろいろの人がちよつと好い顔を見せて直様すぐさまつまらない事に成つてしまふのだ、傘屋の先のお老婆お婆あさんも能い人で有つたし、紺屋こうやのお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛かあゆがつてくれたのだけれど、お老婆さんは中風ちゆうふうで死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを嫌やがつて裏の井戸へ飛込んでしまつた、お前は不人情で己れを捨てて行し、もう何もかもつまらない、何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美ほうびの一つも出やうでは無し朝から晩まで一寸法師の言れいはつづけで、それだからと言つて

一生立つてもこの背せいが延びやうかい、待てば甘露かんろといふけれど己
れなんぞは一日一日嫌やな事ばかり降つて来やがる、一昨日半次
の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾はらわたに出るやうな腸
の腐つたのでは無いと威張つたに、五日とたたずかぶとに兜かぶとをぬがなけ
れば成らないのであらう、そんな嘘うそつ吐つきの、ごまかしの、欲の
深いお前さんを姉ねえさん同様に思つてゐたが口惜しい、もうお京さ
んお前には逢はないよ、どうしてもお前には逢はないよ、長々御
世話さま此処からお礼を申ます、人をつけ、もう誰れの事も当て
にする物か、左様なら、と言つて立あがり沓くつぬぎの草履下駄足に
引ひきかくるを、あれ吉ちゃんそれはお前勘違かたがひひだ、何も私が此処を
離れるとてお前を見捨てる事はしない、私は本ほん当とに兄弟とばかり

思ふのだものそんな愛想あいそづかしは酷ひどからう、と後から羽がひじめに抱き止めて、気の早い子だねとお京の諭さとせば、そんならお妾に行くを廢やめにしなさるかと振かへられて、誰れも願ふて行く処では無いけれど、私はどうしてもかうと決心してゐるのだからそれは折角だけれど聞かれないよと言ふに、吉は涕なみだの目に見つめて、お京さん後生だから此肩ここの手を放しておくんなさい。

青空文庫情報

底本：「にげりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2005（平成17）年5月20日126刷

初出：「国民之友 二百七十七号」

1896（明治29）年1月4日

※底本巻末の编者による語注は省略しました。

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

入力：岡村和彦

校正・・Juki

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

わかれ道

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>